

News Letter Vol. 12

2025年11月発行

このニュースレターでは学生達の活躍、講義や実習の様子、学科の取り組み、動物豆知識などを紹介します。獣医保健看護学科に興味を持ってくれた高校生の皆さんとのコミュニケーションツールになればと思っています。

「まきよるONE」を使った実践学習

今年も情報理工学部との共同開発で生まれた実習教材「まきよるONE」を用いた実践学習を実施しました。この装置は、イヌの脚部に包帯を巻く際の圧力をセンサーで可視化し、「何となく巻く」のではなく「どれくらいの強さで巻けばよいか」を数値で確認できるという仕組みです。“まきよる”は伊予弁で“巻いている”という意味。巻圧計測装置を親しみやすく表現したネーミングです。

2年生の動物内科看護学実習では、静脈への留置針設置の手技を学びます。留置針は点滴の際に血管へ安全に薬液を注入したり、血液を採取したりするための重要な器具です。留置針を安全に動物に取り付けるのは、愛玩動物看護師にとって欠かせない技術のひとつです。この時、包帯を強く巻きすぎると血流が悪くなり、脚部に痛みや腫れを起こすことがあります。逆に弱すぎると留置針が外れやすくなり、治療がうまくいきません。

はじめは力加減がわからず、強い圧で巻いてしまう学生もいましたが、装置を使いながら練習するうちに、ちょうどよい巻圧を感覚でつかめるようになりました。センサーの数値を確認しながら練習を重ねることで、「目標値に近づいてきた！」という声があがりました。“やさしさ”を数字で確かめる学びが成長につながっています。



獣工連携情報を
チェック！



大学の先生たちがどんな研究をしているのか “のぞき見”

研究テーマ：ニワトリの「暑さに負けない体」をつくる

【公共獣医事分野：大内 義光】

Q1 その内容に取り組もうと思ったのはなぜですか？

みなさんは夏の暑さでぐったりしているニワトリを見たことがありますか？実はニワトリは人よりも暑さに弱く、熱中症のような状態になることがあります。体温が上がりすぎると食欲が落ちたり卵を産まなくなったりしてしまいます。私はそんなニワトリを「暑さに強い体」に育てる研究をしています。

Q2 どのようなことが分かりましたか？

ヒナのときに少しだけ高い温度で育てると、大人になってから暑さに強くなることがわかつてきました。これを「サーマルコンディショニング」をいいます。つまり、ヒナのころの環境が将来の体の強さを決めるのです。

Q3 今後の目標はなんですか？

この研究ではニワトリの体温の変化や行動、さらには体の中の遺伝子の働きまで調べています。将来はこの仕組みを応用して、暑さに強い家畜を育てる技術につなげたいと考えています。

Q4 高校生へメッセージ

科学の力で、動物の「生きやすさ」を作ることができます。生き物のしくみを知ることは、地球の未来を守ることにも繋がります。あなたもぜひ、動物や環境のことを「科学の目」で見てみませんか？



こども向け公開講座で準正課活動の取り組みを発表

獣医学部では、地域の子どもたちに「科学の楽しさ」や「動物と向き合う喜び」を感じてもらえるよう、毎年こども向け公開講座を開催しています。今年のテーマは「学んで発見！生きものとわたしたち」。

獣医保健看護学科の学生たちが講師として登壇し、準正課活動で学んだ知識や経験をもとに、子どもたちにもわかりやすく科学や動物との関わりを紹介しました。準正課活動とは、授業（正課）と課外活動（サークル、クラブ活動）の中間に位置づけられる教育活動で、学生が主体となって学びを社会に生かすことを目的としています。

2年生の川上優奈さん（養蜂関連学習プロジェクトに参加）は「ミツバチを通して自然を学ぼう！」をテーマに、ミツバチの身体のつくりや社会の仕組み、花粉を運ぶ役割などを紹介。写真やクイズを使って、ミツバチが生態系で果たす大切な働きをわかりやすく説明しました。

4年生の高橋来海さん（いきものQOLプロジェクトに参加）は「いきもののQOLってなに？—やさしさって、かがくで考えられる？」をテーマに、人と動物が安心して暮らせる社会について発表しました。子どもたちは「イヌがうれしいと感じる時は？」「どうしたら怖くない？」などを考えながら、“いきものの幸せ”を科学の視点から学びました。

学生たちは、参加した子どもたちの年齢に合わせた言葉選びやスライドづくりを工夫し、何度も練習を重ねて本番に臨みました。会場の子どもたちからは多くの質問が寄せられ、「わかりやすくて楽しかった！」という声もあり、学生にとっても“伝える力”を磨く貴重な経験となりました。



愛媛県は“ニホンカワウソ”が最後に保護された県

かつて日本の川や海辺には、全身を茶色い毛で包まれたニホンカワウソが住んでいました。尾が長く、体長は1mほど。魚やエビを食べ、きれいな水を好んで暮らしていましたが、川の開発や水質の悪化で、しだいに姿を消していきました。

1979年、愛媛県宇和島市九島亀ノ浦で保護された個体が、最後となりました。このため、愛媛県は「ニホンカワウソが日本で最後に保護された県」として知られています。ニホンカワウソは、愛媛県の「県獣」にも指定されています。県獣とは、その地域の自然や文化を象徴する動物のことで、県民に親しまれる“シンボルアニマル”です。愛媛県では、清らかな水と豊かな自然の象徴としてニホンカワウソが選ばれました。

2012年に環境省が、ニホンカワウソの絶滅を正式に発表しましたが、愛媛県には今も足跡や剥製、写真などが残り、研究者が生態や遺伝子の研究を続けています。



発行元 岡山理科大学 獣医学部 獣医保健看護学科

お問い合わせ先

〒794-8555 愛媛県今治市いこいの丘1-3

TEL（代表）：0898-52-9000

